

ありがとうが生まれたとき

日常にあった気付き

07

利用者さんの暮らしや、
将来のことも共に考えていきたい。

福西 麻美さん

支援員 4年目

社会福祉法人 さつき福祉会 吹田市立障害者支援交流センター あいほうぶ吹田

私の職場は、生まれながらに身体障がいや知的障がいを持つ方や、事故や疾患などで体が不自由になった中途障がい者の方など、さまざまな利用者さんが通所され、6つの班に分かれて、リハビリや個々の状態にあわせた活動をおこなっています。どうすれば、利用者のみなさんがいきいきと過ごせる環境を整えていくことができるか。発見と試行錯誤の毎日です。

しかし、利用者さんにとって、日中施設にいる時間だけが楽しければいいというわけではありません。利用者さんには、それぞれの家庭状況や、これからの人生があるので、もっと広い視野で、利用者さんの暮らしを考えていかなければいけないと思います。



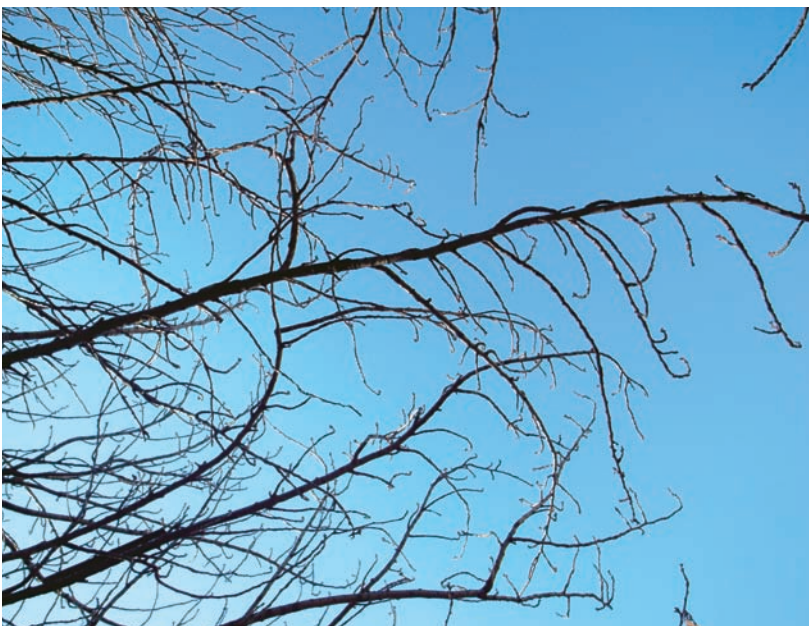
そのことに気づかせてくれたのは、私が初めて担当した班の、ある利用者さんでした。Aさんは、一家を支えていたお父さんを亡くされ、お母さんだけの力では、Aさんの生活を支えていくことができなくなりました。それ以来Aさんは、自宅を離れ、ショートステイを利用しながら、数日おきに生活場所が変わる暮らしを余儀なくされています。Aさんの体重が急激に減ってしまったり、涙を流したりしているのを見て、私もとてもつらい気持ちになりました。それでもAさんは、環境の変化に負けず、頑張ろうとしていました。以前はかなり偏食があったのですが、それまで苦手だったものを頑張って食べられるようになったのです。自宅で好きなものを食べるのができなくなってしまった、という事情もあったかもしれませんが、今では、いろいろなものをおいしく食べる力がついています。食事の時間が、前より楽しいものになっていくのだろうかと、見ていて感じます。つらいだろうけど、一生懸命頑張ろうとしているAさんの姿に、笑顔や元気だけでなく、強さをもらうことができました。

Aさんは、重度の知的障がいや自閉症を抱えていて、つらい思いや悩みを、直接言葉で訴えることができません。私が話す言葉も、ほとんど伝わっていないかもしれませんが、Aさんは窓の外を見るのが好きなのですが、ある時、一緒に窓の外を見ながら「淋しいよね、家に帰れなくて。でも、お母さんもきつと淋しいと思うよ」と話しかけました。Aさんは私に向かってふっと、笑

みを見せてくれました。言葉自体は伝わっていないかもしれませんが、Aさんに気持ちが通じ、心を通わせることができたのかもしれない。

また、その出来事がきっかけで、「将来親がいなくなった時に、利用者本人はどうなるのか」という、これまで目を背けられがちだった問題意識を改めて持ち、ご家族との面談などでそういうお話をさせていただくようになりました。

「強さと、大切な問題に向き合うきっかけをくれて、ありがとう」。それぞれのご家庭の事情もあり、難しい問題ではありませんが、Aさんが身をもって教えてくれた教訓を活かして、この先も利用者さんたちの暮らしの問題に目を向け、私たちにできることを考えていきたいと思っています。





最期まで、 自分らしく生きて欲しい。

山崎 亜紀子さん

医療ソーシャルワーカー9年目
社会福祉法人 恩賜財団 大阪府 済生会茨木病院

病院の相談室には、悩みや不安を抱えた患者さまが毎日訪れます。「医療費が払えない」「手術が怖くて眠れない」「家が車椅子に対応していない」など、相談内容は人によってさまざま。それらを解決するために、病院や行政などに働きかけるのが私の役目です。

がんの患者さまから「治らないのに治療を続けたくない」と相談を受けたとき、本人に「がんばろう」と励まし続け、医師とも連携を取っていたけど、ある日突然来なくなりました。脳卒中の後遺症でマヒが残った患者さまから「家で生活が不安なので、退院を延ばして欲しい」と相談を受けた際も、病院のベッド数の関係で叶わなかったこともあります。

「もし担当が私じゃなかったら」。うまくいかないときは、申し訳ない気持ちと共に、未熟な自分への怒りがこみ上げてきます。そんなとき、私を支えてくれる思い出があります。

今から4年前。末期がんの患者さまから「家に帰りたい」と相談を受けました。医師や行政、ケアマネジャーに何度も頼みましたが、結果はNO。身寄りが無い上にアルツハイマー症も患っていたため、一人で過ごすことへのリスクが大きすぎたのです。それでも患者さまは、帰りたいと私に言い続けました。私もあらゆる方法を模索し、たどり着いた答え、「交替で泊まることはできないでしょうか?」。はじめは通用しなかったけど、一人、また一人と、賛同の声が集まりました。そしてついに、一時帰宅の許可が下りたのです。私が泊まりに行った日のこと。入院する前はいつも愛用していたであろうソファでくつろぎながら、患者さまは誰に言うわけでもなくつぶやきました。「生きててよかった」。その言葉を聞いて、自分の価値を認めていただいたよううれしかったです。その1週間後に容態が悪化して再入院。最期は病院で息を引き取られましたが、わずかの間でも自分らしい時間を過ごしてもらったことができたと思います。

この思い出があるから、諦めずに頑張れる。実は、他の患者さまからいただいた言葉も、手帳に書きとめるようにしているんです。落ち込んだときは、それを聞く。「ありがとう」「助かりました」。他の人から見るとたわいもない言葉だけど、私はその言葉に背中を押されて今日も患者さまの悩みと向き合っています。

